

募集投句 選者別入選作品【一般の部】

稲畑汀子選

《特選》

初花に出会へさうなる空の色

兵庫県 平 敦子

【選評】 吉野山の桜が彷彿と目に浮かぶ。

実際に出会えるかもしれない陽気になってきた。
実際に出会えたであろうか

紀ノ川に渡しの名残猫柳

和歌山県 宮本 啓子

【選評】 今は橋と言えば橋がかかっている。

しかし渡しの名残の風景には情緒をかもし出している

青芒風の育てし静心

愛媛県 豊田 みゆき

【選評】 風に揺れて育つてくると青芒風は風が育てた樽に見える。
作者の感性であろう。

《入選》

しゃぼん玉どこまで続くその旅路

愛知県立安城高等学校 下 桃子

あふれだす期待と共に桜咲く

愛知県立安城高等学校 大泉 汰賀

着任や紀州木の国山笑ふ

大阪府 今井 文雄

南朝を訪ひし吉野の花は奥

奈良県 芳林 淳子

蜜柑山又蜜柑山紀勢線

兵庫県 小林 恕水

耕して水のつながる峡の村

秋田県 種村 聖巴子

堂涼し根来塗なる太柱

大阪府 稲垣 美知子

帰省子の知恵も借りたる町起し

神奈川県 高橋 俊彦

四阿に聞く雨音や沙羅の花

愛媛県 豊田 耕造

根来寺のもの音一つなき月夜

愛媛県 古谷 久代

草を引きつつ許す気になってきし

兵庫県 ほりもとちか

小鳥くることも文庫の開設日

和歌山県 南 壽子

山里は水音ばかり初蛩

山口県 國田 邦子

少し濡れすでにずぶ濡れ水遊び

大阪府 板敷 清光

ゆすらうめ紀州訛りの三姉妹

和歌山県 中筋 のぶ子

岩岡 中正 選

《特 選》

旅のぶらんこ山彦のやうに漕ぐ

福岡県 藤崎 由希子

【選評】「ぶらんこ」といえばすぐ童心を詠んだりするが、この句は「旅の」ぶらんこ。

旅の開放感が楽しい。さらに、ぶらんこが揺れるさまを、呼べば答える山彦にたとえたところが、斬新。身体ごとの実感の句。

鬨鶏に叱咤のはっぴ脱ぎにけり

大阪府 鵜川 久子

【選評】鬨鶏に興奮していく姿を、「叱咤のはっぴを脱ぎにけり」と、その叱咤の声から、

はっぴを脱ぐさまから、しつかり活写した句。

全体として、盛り上っていく会場の歓声と熱気が十分に伝わってくる。

小判草鈴ふるやうな母の声

和歌山県 内海 富美

【選評】小判草だと小判の形の花穂を詠むことが多いが、この句は「鈴ふる」とその音を連想し、

さらにそのようにやさしい声をしていた「母」へと展開したところが、思いが深く物語がある。美しい母恋の句である。

《入 選》

告白の勇気をください初詣

愛知県立安城高等学校 河野 柚香

チューリップいろとりどりの恋をして

愛知県立安城高等学校 土屋 瑠久

束の間の日差しに摘める露の臺

和歌山県 富山 貞子

補陀落の海見ゆるまで登高す

島根県 吉浦 増

旅人か昼寝してゐる寺の縁

和歌山県 上中 光

俳諧を学ぶ白靴新調す

石川県 松本 松魚

母の日は母のことだけ考える

福岡県 本田 観波

夫あらば庭吹く風もセルの頃

京都府 細川 玲子

山雨急いつも虎杖咲く頃は

大阪府 久保田 まり子

千羽鶴折りつぐことも春愁

和歌山県 久保 雄次

遊船の動きて風の生れけり

香川県 和泉 金子

横丁は昭和の匂ひ走り梅雨

京都府 能勢 ゆり

紀の国はほんに木のくに天高し

兵庫県 島田 英樹

僧兵の駆くる幻草茂る

大阪府 彰 子

母の日の握れば薄くなりたる手

千葉県 鈴木 南子

宇多 喜代子 選

《特 選》

菜の花忌ゆつくりと雲流れけり

和歌山県 宮本 啓子

【選評】 菜の花忌は菜の花が好きだった司馬遼太郎の忌日で二月十二日。この日、早春の雲がゆつくりと流れている。司馬遼太郎の残した重厚にして軽快な筆致の作品の数々がしのばれる句である

黒白の光となりて燕来る

和歌山県 山中 晴美

【選評】 燕は夏鳥。春に南から日本にやってきて営巢し、子燕を育てる。黒は背の色、白は腹の色。直線に飛ぶ燕を「光」ととらえた句。毎年やってくる燕を心待ちにしている作者の気持ちまでが伝わってくる。

草丈に浮いて沈んで梅雨の蝶

石川県 宮下 末子

【選評】 梅雨の時期、夏草はぐいぐい丈を伸ばしたくましくなってくる。そんな草のあたりを、梅雨時のしめりで羽を重くした蝶が、それでも軽々しく飛びまわっている。春の蝶にない梅雨の蝶の様子のがえる句。

《入 選》

夏帽子つばに書きたるメッセージ

愛知県立安城高等学校 神谷 晴輝

弟を木陰に誘う夏の蝶

愛知県立安城高等学校 松浦 賢哉

集まるも散るも舟虫一斎に

大阪府 小畑 晴子

松明の一揆の如く虫送

高知県 森脇 杏花

でこぼこの時間割来る春の風

宮城県クラーク記念国際高等学校 横溝 惺哉

夏草の匂ひもろとも刈り払い

石川県 松本 松魚

母の日は母のことだけ考える

福岡県 本田 観波

新しき牛舎の横の大桜

宮崎県 藤原 李苑

目の前に煙広がる冬の朝

愛知県立安城高等学校 下 桃子

海中の匂ひをのぞく箱眼鏡

兵庫県 平尾 美智男

松花粉散る石の上草の上

熊本県 大江田 妙子

空跳んで釣り上げらるる太鯉

兵庫県 北沢 恭子

振花や振り向くたびに過去となる

神奈川県 渡辺 一充

初夢を先に見ている妹よ

和歌山県立桐蔭高等学校 古川 陽菜

由良の門の男波一閃南風吹く

大阪府 南 風子

大輪靖宏選

《特選》

あたたかや耳が拾ひし土地なまり

山梨県

櫻井 すす子

【選評】

耳が拾ったという表現から、ふとした折に土地訛りに触れたことがうまく示されている。標準語からは感じられない人間味が土地訛りにはあり、それに触れたことによって、心になつかしくも明るい温かみが生まれたのだ。

散るといふ美学を知らず水中花

岡山県

岡田 邦男

【選評】

花が散るのは無残なものだが、変化の果ての一つの終焉という自然界の掟がそこに見られ、これも一つの美である。水中花は美しいが、自然界が示す散るといふ美がない。美しい水中花のむなしさに気付いている句だ。

髪なびく君の後ろに夏の雲

愛知県立安城高等学校

金本 夏月

【選評】

素直な詠み方で、若さや活気がうまく表現できている。君という呼びかけで、髪の長い少女への親しみが表現でき、湧き上がる夏の雲を添えることによって、自分たちの間にも希望が湧いてくることを示し得ている。

《入選》

縄電車降りて園児等野に遊ぶ

京都府

前崎 とし江

主見る盲導犬の涼しき目

高知県

森脇 杏花

遊船の動きて風の生れけり

香川県

和泉 金子

著莪の花雨にやさしき彩となる

愛知県

加藤 清美

僕と君桜の道で手を繋ぐ

愛知県立安城高等学校

松下 尚暉

水源は大台ヶ原稚鮎跳ぶ

奈良県

鈴木 玲子

万緑に染まりベンチを動かさる

鳥取県

和田 田鶴子

振花の風受け流すねぢれかな

和歌山県

山本 容子

ひた急ぐ蜷にも恋のありぬべし

兵庫県

森山 久代

秋の夜や自分と話す仕舞風呂

和歌山県

三上 孝子

跳び出して草の色なる蛙かな

兵庫県

平尾 美智男

夜の灯に掬はれてゆく金魚かな

高知県

岡林 知世子

真つ直ぐな道まつすぐに風薫る

石川県

辰巳 葉流

月の夜にひびく法螺貝多武峰

山口県

ささのはささら

コップ酒かすかに揺れて虫時雨

和歌山県

久保 雄次

桑島 啓司 選

《特 選》

オルゴール鳴らし亡き子と雛飾る

和歌山県 武友 朋子

【選評】 毎年、三月三日の節句を親子で雛人形を飾って迎えている。今年は、お子さんが早世して悲しく寂しいが、亡き子はいつも傍らにいますと思つて心を励ましている。
「亡き子と」の「と」が眼目。

春雷や看護の道に迷ひなし

和歌山県 湯上 ひとみ

【選評】 看護師の仕事は厳しく、奉仕の精神がなければ勤まらないであろう。
その奉仕の姿を春雷が称えてくれているのである。ナイチンゲール誓詞の一部（患者さんの幸せを願ひこの身を捧げます）。

枯淡なるヒマワリだけは我を見る

愛知県立安城高等学校 鶴崎 大空

【選評】 作者は高校二年生。青春真っ只中である。本来ならば笑顔のような向日葵に感動するのだが、この青年は枯淡な向日葵に感動したのである。世の隅で静かにしていても、こころある人は決して見落とすことはない。

《入 選》

今生の別れと知らず火蛾猛る

東京都 駿河 兼吉

今はただ仲良しこよししゃぼん玉

愛知県立安城高等学校

伊藤 ゆりあ

板の間は母のぬくもり露を剥く

福岡県 梶原 マサ子

補陀落の沖を照らして盆の月

山口県 ささのはさら

百歳の嫗の教へ桃の花

和歌山県 岸井 照代

小恙の身に十葉のある暮し

兵庫県 池田 雅かず

保育所の午睡ねんねん子守唄

和歌山県 木下 敦子

青春の友は何処に薔薇芽吹く

宮崎県 原田 マキ子

雁渡しいつもの場所に川漁師

和歌山県 山本 はじむ

ショーペンハウアーも仏陀も蟻の道

岡山県 岡田 邦男

花蜜柑農衣の母の胸白き

和歌山県 大久保 智子

相槌もいらぬ二人の新茶かな

兵庫県 縄岡 眞理子

伝へ聞くだけの病状冬の星

福岡県 秋吉 鈴子

振花の風受け流すねぢれかな

和歌山県 山本 容子

統合と決まり最後の運動会

福岡県 和合 久美子

鈴木 しげを選

《特 選》

堂涼し根来塗なる太柱

大阪府 稲垣 美知子

【選評】

根来塗は主に漆器が有名であるがこの句の示すように寺院建築の堂塔の柱にも根来塗の秀れた技法が施されているのであろう。木造の長い歳月を支えているのである。風通しのよい堂内のありさまが涼しの一語によく呼応している。

春雷や看護の道に迷ひなし

和歌山県 湯上 ひとみ

【選評】

人間にとって長生きはめでたい。幸せは健康で過せるかである。現実はその簡単ではない。作者は充実した看護福祉社会を目指す人であろう。看護の道に迷ひなしの覚悟が春の雷の初々しい勢いと響きあっている。

花冷や紀州茶粥に梅ひとつ

和歌山県 佐戸 律子

【選評】

茶の煎じ汁で炊いた粥が茶粥である。奈良茶粥がよく知られるが紀州茶粥と呼ぶ茶粥もあるらしい。いずれにせよこれに紀州名物の梅干が一つ添えてあるのがうれしい。花の頃の寒さに茶粥のぬくもりが沁みるのである。

《入 選》

かじかむ手受験番号さがしたり

愛知県立安城高等学校 水野 芳華

春の町海にのまれて瓦礫山

愛知県立安城高等学校 小野 未菜美

おむすびの紀州の梅や花吹雪

茨城県 黒木 成剛

神留守の淡海の国の湖日和

滋賀県 王仁 曄文

紀の国はまこと木の国風薫る

兵庫県 小林 恕水

一月の旅の南紀の花菜道

石川県 永井 佐和子

父のくに母のくになる梅を干す

大阪府 鶴川 久子

楊梅の絶きを踏んで行者堂

和歌山県 川端 章子

初旅の母のみやげは根来塗

群馬県 青木 俊子

古茶新茶夫の倍生き早や傘寿

香川県 和泉 金子

遊船の動きて風の生れけり

香川県 和泉 金子

擦れ違ふ僧に一礼ほととぎす

和歌山県 宮内 信子

小田井の水青田目ざしてまっしぐら

和歌山県 宮本 悦子

原爆忌被爆のピアノ弾かれけり

長崎県 原 典子

紀の川の広き川原や今日の月

和歌山県 手拝 なをみ

高野 ムツオ 選

《特 選》

教科書の残りページに春の風

愛知県立安城高等学校

水野 紘希

【選評】卒業間近になった教室の一場面である。

窓から入ってきた春風が教科書の中にも潜っていったと感じた。同時にもう数ページで教科書も終えると改めて気づいた。残り少ない高校生活との惜別の思いが深い。

春風や地球膨らむ心地して

和歌山県

津田 京子

【選評】

移動性高気圧のせいで春風が吹き始めると草木が萌え出し野山がふんわりした感じになる。それを「地球膨らむ」と誇張したのである。地球全体が風船となったようにも想像できる楽しさがある。

飛魚の海の重さを脱ぎて飛ぶ

兵庫県

吉村 玲子

【選評】

飛魚が飛ぶのは、鮪などの大型の魚の捕食から逃れるためのようだ。その必死の姿を水圧から解放された喜びのさまととらえた。実際に単なる遊びとの説もある。生き生きとした飛魚の飛翔のさまが想像できる。

《入 選》

制服の肩に桜のこぼれくる

愛知県立安城高等学校

松本 伎郁

炎天下人々突き刺すリトルボーイ

愛知県立安城高等学校

泊 大翔

悩みごとともくもくもくと夏の雲

愛知県立安城高等学校

水谷 駿介

指先に触れたきえくぼ春の雲

京都府

古川 邑秋

ヒロシマや風にあらがふ夏の蝶

埼玉県

渡邊 照夫

兵偲ぶ弾痕に沁む蝉時雨

和歌山県

田嶋 節子

窯出しの熱気を並べ秋深し

和歌山県

武友 朋子

根来衆駈け抜けるかの青嵐

兵庫県

内田 あさ子

花蜜柑黒潮の香の駈け上がる

神奈川県

宮崎 清美

花みかん匂ふ一人の家となり

宮崎県

牧野 尚幸

空蟬の背に拡げたる空の青

福岡県

莞 峰

白南風に乗りて根来の子守唄

奈良県

香西 信子

満月に届きさうなる河鹿笛

和歌山県

浦 貴子

祖父がゐて父ゐて畦に田搔牛

大阪府

角野 京子

日の溜るところ綿虫たまりけり

宮崎県

田上 比呂美

田中春生選

《特選》

水色に水はあつまり初桜

埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園 藤原 希乃

【選評】 水の色は水色で当然のようについて、本来水は無色透明。透明感を保ったまま容積を増し、光を反射することで水色となる。初桜のはなびらにも同じような透明感がある。清らかな美しさを湛えた作品である。

木の花の清潔五月来たりけり

千葉県 有田川 あき

【選評】 何の木の花と明示はしていないが、白色の薄い花卉を創造する。五月の美しい空を背景にしてすらりと伸びた枝に咲く花の姿は清らかな印象を与える。地を離れ、はるか天上の世界を連想するからか。大らかなしらべも秀抜。

朴ひらく巫の衣の明るさに

東京都 大嶋 康弘

【選評】 巫女の衣の明るさは初夏の日差しの明るさによるものであり、朴の花が咲くのも夏の到来によるもの。それにもかかわらず、衣の明るさと朴の開花をさりげなく結びつけたところが見事。感覚と技の冴えを感じた。

《入選》

あと一点サーブの先の鰭雲

愛知県立安城高等学校 高須 遥香

炎天下一斉に鳴るホイッスル

愛知県立安城高等学校 岩月 柊唯

子燕やジャズのリズムに乗り出して

大阪府 中嶋 富雄

背くもの凭れ合ふもの枯蓮

和歌山県 宮本 啓子

亀の子に王子ヶ浜の波やさし

石川県 永井 佐和子

水澄みて消えてしまひし水の色

和歌山県 橋本 栄夫

山里は水音ばかり初蛩

山口県 國田 邦子

本山の客と承知の道をしへ

和歌山県 梶本 洋子

桃の花母より届く産着かな

和歌山県 島本 美紀

白南風や雲より高く海豚跳び

京都府 杉山 哲也

紀の川を見下す丘の桃の花

長崎県 園田 正栄

弾痕の塔の歴日秋澄めり

和歌山県 宇田 篤子

教室のドアの重さや休暇明け

和歌山県 久保 雄次

祖父がゐて父ゐて畦に田搔牛

大阪府 角野 京子

新しき牛舎の横の大桜

宮崎県 藤原 李苑

対馬康子選

《特選》

海神と父の呑むころ月出づる

神奈川県 持田 敏朗

【選評】海は恵の源であると共に死と隣り合わせの危険な場所です。

真摯に海を愛し、海の神を敬い、無事を祈ります。明け方暗いうちに漁に出て、漁を終えまた明日の準備をする。紀伊らしい暮しの趣に祈りの月が登ります。

恋の闇深めて淡き烏賊火かな

福岡県 白石 照子

【選評】

烏賊釣船の灯が暗い沖に連なる景は幻想的です。夏の夜の水面に烏賊の群が火を恋うように集まります。恋の葛藤には、燃える思いとそれを呑み込む闇が生まれるものです。「深めて淡き」という表現にしみじみと余韻が広がります。

行く秋を連れて高野に詣でけり

和歌山県 久保 雄次

【選評】

「同行二人」は四国お遍路に、いつも弘法大師と共にあるということですが、掲句は過ぎ去ってゆく秋を連れて高野山詣でに行くのです。そこには今でも瞑想する大師がおられます。無常観の中に心の安らぎを感じます。

《入選》

白靴を汚し壊して駆ける日々

愛知県立安城高等学校 荻野 夏萌

トラックの上を走るはかげろうか

愛知県立安城高等学校 飛田 悠旭

シャツターを切り夏空に立ちにけり

愛知県立安城高等学校 塚原 里那

正方形どうしてとがる暮の秋

愛知県立安城高等学校 石橋 遼

ひっそりと平和をつくる渡り鳥

愛知県立安城高等学校 鈴木 愛莉

たんぽぽがひとりでゆれる古い町

愛知県立安城高等学校 田中 美羽

耕して水のつながる峡の村

秋田県 種村 聖巴子

漢方の草根木皮囀れり

秋田県 岸部 吟遊

根来寺の大門駆くる恋の猫

大阪府 鶴川 久子

白夜なり国境通過証明書

秋田県 五代儀 幹雄

ゆつくりと減ぶ地球の夏休み

岡山県 岡田 邦男

夕闇に黒穂を燃やす子らの声

和歌山県 前田 汐音

垂直に千年競ひ滝の音

香川県 村上 美恵

光り出す向きを定めて百合の花

大阪府 乾 祐子

どこへでも行けるつもりや更衣

奈良県 小林 伊久子

手拝裕任選

《特選》

入学式初めての音立てながら

愛知県立安城高等学校

土屋 仁衣菜

【選評】

「初めての音」が眼目。具体的に何の音か示されていないゆえ、その音の正体を読者が探ろうと試みる。式場の扉が開く音、床の軋み、上履きの音、椅子に座る音。入学式ならではの静寂と緊張感が伝わってくる。

蛇穴を出でて括れを日に戻す

福岡県

浅川 走帆

【選評】

冬の間、闇の中でとぐろを巻いていた蛇が、地上に出て来た場面。人間であれば眩しそうに伸びをすることでだが、蛇は春の日差しを浴びながら、ゆっくりと括れを伸ばすのである。リアルな描写が印象的。

けふの日を広げるやうに白日傘

和歌山県

森本 美和

【選評】

「日」の解釈によって二通り考えられるが、両方の意味を含めて鑑賞したい作品。「日傘を広げると同時に今日が始まる」「まるで日差しを広げるかのように日傘を開き」というように。飛躍かつ大胆な表現が新鮮である。

《入選》

夏帽子つばに書きたるメッセージ

愛知県立安城高等学校

神谷 晴輝

獲物掛け蜘蛛の罔力抜きにけり

山口県

永田 芳子

帰省子の知恵も借りたる町起し

神奈川県

高橋 俊彦

秘境とは斜めの暮し桐の花

兵庫県

森山 久代

夜の灯に掬はれてゆく金魚かな

高知県

岡林 知世子

ランドセル写生に残し卒業す

和歌山県

榎本 政義

絨毯爆撃さながらに驟雨来る

岡山県

岡田 邦男

ゆつくりと減ぶ地球の夏休み

岡山県

岡田 邦男

植ゑたてを頂きますと根切虫

和歌山県

辻 幸子

万屋の埃塗れのサングラス

和歌山県

禎 宣

あたたかや耳が拾ひし土地なまり

山梨県

櫻井 すゑ子

初夏や盥の中の模型船

福井県

高石 まゆみ

蛭狩り闇に慣れたる帰り道

愛知県

伊藤 京子

戦争はなほ八月の土踏まず

埼玉県

高木 宇大

夏手袋後ろ手に組み粘菌図

東京都

石地 まゆみ

中村和弘選

《特選》

雪だるま笑顔が消えて闇の中

愛知県立安城高等学校

渡邊 聖菜

【選評】

作られた時は笑顔の雪だるまも時間が経つにつれ溶け笑顔も消え夜の闇の中に沈む。時間の経過も含めシンプルに表現。半ば作者の心象風景と思えるが、孤独感さらに今日の社会の閉塞感等が伝わってくる。

時の日や銀坑道の鑿の跡

兵庫 県

瀬崎 こまち

【選評】

時の日は六月十日、日本に初めて水時計が設置された日を記念して設けられた。そして日本はその昔世界屈指の銀産出国、銀を輸出その金でヨーロッパ等の物産、文化を輸入。時の日とどこかで関係。その鑿跡が金も鉱山に残る。

卯月野に授かる山羊の乳真白

和歌山 県

園部 知宏

【選評】

卯月は五月にあたる。草原も青々と育つ。それに放たれた山羊は、栄養豊かな青々とした草を食べ健康に育つ。そして真白な良質の乳を出し我々に与えてくれる。それは卯月野が授けてくれた物。ここには豊かな世界がある。

《入選》

遅き日の予備校生は哲学者

東京 都

駿河 兼吉

風鈴と天国にゐるおじいちゃん

愛知県立安城高等学校

眞島 志歩

陽炎や惨めに跳ねし空葉莢

愛知県立安城高等学校

杉浦 雅弥

少年に物の怪走る蛍の夜

京 都 府

本谷 眞治郎

育つ木と育てる木あり登山道

熊 本 県

岩城 恵美子

花蜜柑黒潮の香の駆け上がる

神奈川 県

宮崎 清美

ふる里をダム湖へ訪はば桐の花

福 岡 県

川口 茂則

裸木のあひに月夜の百度石

和歌山 県

前田 長徳

姫女菟ひかりの粒の叢となる

鹿児島 県

山本 誠子

夏の月呪文のごとき破砕帯

埼 玉 県

石原 道明

浮き苗のひとつもあらぬ御饌田かな

奈 良 県

高塚 康文

洗髪の泡のさ中や詩神降る

神奈川 県

千葉 喬子

朝焼けや磨き丸太は香を放つ

奈 良 県

和田 富子

庭下駄を童女に替はる緑の夜

東 京 都

山月 恍

サバナナの樹上の豹よ星月夜

和歌山 県

下前 薫

西山 睦 選

《特 選》

夏帽子つばに書きたるメッセージ

愛知県立安城高等学校

神谷 晴輝

【選評】 高校生の夏のドラマを感じる一句。帽子のつばには、きつと応援メッセージが所せましと書いてあるに違いない。県大会か、あるいは全国大会か。大勢の人の熱を感じながら、つばに手をあて、気持ちをつるい立たせる。

耕して水のつながる峡の村

秋 田 県

種村 聖巴子

【選評】 田の耕しがいよいよ始まった。耕しが始まると、村に活気が満ちてくる。これから五風十雨を経て、実りの秋を迎える。生活水を使っていた山水も田の側溝を巡るようになり、山峡の村にも一体感が生まれてくる。

秘境とは斜めの暮し桐の花

兵 庫 県

森山 久代

【選評】 ややオーバーに表現しているが、山の急斜面を拓いて建てた家や畑は、たしかに行き来に斜面をなぞることになる。こんな所にも人が住み、糧を得ていることに、人間の底力を感じている。感覚と技の冴えを感じた。秘境とは人の強さを試す所なのだ。

《入 選》

さそり座に押されて走る上り坂

愛知県立安城高等学校

山本 竜甲

コンクール金賞のがす残暑かな

愛知県立安城高等学校

小野 未菜美

サッカーのフワード走る夏の空

愛知県立安城高等学校

野村 拓未

着任や紀州木の国山笑ふ

大 阪 府

今井 文雄

紀の国や蜜柑山にも子守歌

茨 城 県

黒木 成剛

もう一つ関伽桶にあり盆の月

福 岡 県

憲 二

トロ箱の木の香を積みて漁始

和 歌 山 県

上野山 博子

紀の国の人みな親し柿の花

三 重 県

仁木 正子

図書館へ駈けつけて行く捕虫網

秋 田 県

五代儀 幹雄

僧兵の駈けし棚田も田植季

奈 良 県

香西 信子

青洲の薬研に鍔や春惜しむ

和 歌 山 県

島本 美紀

たちまちに湯となる水や墓洗ふ

三 重 県

平田 冬か

虹の根へ虹の卵を探しゆく

徳 島 県

山之口 ト一

祖父がゐて父ゐて畦に田搔牛

大 阪 府

角野 京子

千頭の牛を呑む込む霧襖

北 海 道

藤林 正則

坊城 俊樹 選

《特 選》

金木犀こんぺいとうの星が降る

愛知県立安城高等学校

小川 奏

【選評】 金木犀はその香りとともに、小さな朱の花が鏤められている。それ自体も星みたいだが、そこへ降る星というのも金平糖みたいに角があり可愛い色の星なのだろう。こんなやわらかな感性によって作られた句には驚きがある。

原爆忌齧れば苦き医者いらず

和歌山県 土江 祥元

【選評】 「医者いらず」というと、柿や林檎・梅など思い浮かべる。戦争の悲惨さはもとより、その頃の食べ物にたいする思いというものが真摯に出ている。戦争の悲惨さはもとより、葉などに頼れなかった当時の人には根性があった。

あかときや蝉声の潮さして来し

兵庫 県 鳥越 やすこ

【選評】 夜明けで東の空が白み始める頃、蝉たちは鳴き始める。それが潮のように徐々に押し寄せてくる。蝉の声を海のさざ波の音にたとえた美しさは素晴らしい。かつて本当の波音を蝉声と思って起きた事を思い出した。

《入 選》

空蟬の背に広げたる空の青

福岡 県 莞 峰

鉄砲隊の火種一列曼珠沙華

和歌山 県 濱端 順子

引越は己が手でまづ竹婦人

大阪 府 上西 左大信

太陽にまみれて子等の水遊

香 川 県 岡田 貞幹

風鈴と天国にゐるおじいちゃん

愛知県立安城高等学校 眞島 志歩

髪なびく君の後ろに夏の雲

愛知県立安城高等学校 金本 夏月

この気持ち恋も甘いもさつまいいも

愛知県立安城高等学校 北岡 叶羽

隙間風母の帰りはまだですよ

愛知県立安城高等学校 小池 穂佳

勝利まで届け届けと夏の空

愛知県立安城高等学校 神谷 響希

おでん屋に昭和が屯してをりぬ

愛 媛 県 青 天 子

産声をあげて八月十五日

山 口 県 三野 公子

補陀落の海まつすぐに帰燕かな

山 口 県 ささのはさら

螢火の落ちて呪縛の解けにけり

福 岡 県 憲 二

青嶺あり青嶺分け入る古道あり

島 根 県 吉浦 増

青梅雨や頭剃りあふ修行僧

和歌山 県 井澤 佳代子

矢野景一選

《特選》

秘境とは斜めの暮し桐の花

兵庫 森山 久代

【選評】 秘境と呼ばれるところは日本に限らず山岳地帯であることが多い。

山の斜面をどう宅地に、田や畑に切り開くかが、克服すべき課題であっただろう。斜面を上り下りすることが生きることであった。「斜めの暮し」の発見がよい。

住所縫ひし母のリユックに風薫る

和歌山 植田 節子

【選評】

この母は認知症が出はじめたのだろう。家の外へ出かけたのはよいが帰り道がわからなくなる、そんな症状が時にあるのだ。その時のために備えて母常用のリユックに住所氏名電話番号を書いたものを縫いつけたのだろう。

水たまり落葉の舟が空をゆく

和歌山県立桐蔭高等学校 池之端 紗衣

【選評】

雨のあとにできた水たまりだろうか。そこに一片の落葉が落ちて浮んだ。すると風に推されてか落葉が水面に映る空をすべりはじめた。落葉の舟が空を航く舟になったのだ。よく観察しているし、ロマンもある作品だ。

《入選》

本の端汗でしおれて曲がりたる

愛知県立安城高等学校 深谷 真以子

告白の勇気をください初詣

愛知県立安城高等学校 河野 柚香

ホイッスル鳴るまで走った夏の空

愛知県立安城高等学校 野村 拓未

銀色の雨の降るなり葱坊主

岡山 伴 明子

母の日の料理は母の味をもて

和歌山 太田 妙子

残る鴨里人の貌してをりぬ

熊本 西村 楊子

一業に徹し生涯漆掻く

東京 谷川 治

本山の客と承知の道をしへ

和歌山 梶本 洋子

僧兵の駈けし棚田も田植季

奈良 香西 信子

朝市の人柄を買ふ菜漬かな

大阪 久 美 子

鉄砲隊の火種一列曼珠沙華

和歌山 濱端 順子

土用波海が地団駄踏んでをり

兵庫 生嶋 わこ

薔薇の名は長し記憶は短くて

山口 加藤 ゆき子

たかんなの伸びの眩しき喪あけかな

東京 大嶋 康弘

黄の褒章着けて棚田の捨案山子

宮城 山田 庸備

山尾 玉藻 選

《特 選》

水色に水はあつまり初桜

埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園 藤原 希乃

【選評】人は身近に水を感じると何処か安堵します。

作者もそんな思いかから、水もまた一所に寄り合ってこそ安らかなのだと感じたのです。それを「水色に水はあつまり」と感覚的に表現し「初桜」の喜びの心に重ねた見事な一句です。

み熊野は神代となれり霧襖

大阪府 南光 翠峰

【選評】奥深い森林の地で、熊野三山に通じる古道が伸び、神々しい那智の瀧等、歴史や伝承で彩られる

熊野は間違はなく太古の昔に繋がる地です。殊に深い霧に包まれたならいよいよ神秘的で、「神代となれり」の断定は的確です。

初夢を先に見ている妹よ

和歌山県立桐蔭高等学校 古川 陽菜

【選評】元日の夜、作者は早々と寝入っている妹の寝顔を覗き込み、初夢を見ているに違いありません。

思っています。この句の場合、「先に」が句の要で、妹に先駆けられたとの思いが見て取れます。微笑ましさを滲み出る一句です。

《入 選》

天の川心の中に流れゆく

愛知県立安城高等学校 眞島 志歩

夏帽子つばに書きたるメッセージ

愛知県立安城高等学校 神谷 晴輝

透明の瓶に詰め置く金木犀

愛知県立安城高等学校 國島 雛子

葉桜が無邪気な日々を攫つてく

愛知県立安城高等学校 齋藤 翔

僧兵の寺へ蜂起の鶏頭花

山口県 さやのはさやら

僧兵の寺の四方より隙間風

大阪府 小畑 晴子

父のくに母のくになる梅を干す

大阪府 鶴川 久子

木の国の根の世犇めく春の闇

和歌山県 片山 綾子

青梅雨や頭剃りあふ修行僧

和歌山県 井澤 佳代子

夏立つや森は翼を広げつつ

神奈川県 渡辺 一充

滝拝すなにかと神に守られて

兵庫県 英賀 美千代

須弥壇の黻寄せ付けぬ根来塗

和歌山県 久喜 和子

樹海へと巻く青簾あますなく

和歌山県 谷本 町子

千年の夢の途中の蝸牛

京都府 平 万紀子

止め椀の根来に足りし夏座敷

京都府 大山 文子